



DXファーストステップ 支援事業

DX事例集

CONTENTS



事業詳細

支援事例紹介

- 04 > 有限会社 周陽ガーデン**
「紙と属人化」からの脱却 — 40年分のデータをデジタルに集約し、組織の「自走」を目指す 4
- 05 > 有限会社 フジカワ**
「現場の見える化」が会社を強くする — 14名の建設会社が挑む、元受け案件受託に向けたDX 5
- 06 > 株式会社 森モータース**
「悩むくらいなら、まず動く」 — 14名の自動車整備工場が、伴走支援で実現したアナログ脱却への確かな一歩 ... 6
- 07 > 富士機工 株式会社**
「ブラックボックス」からの脱却 — IT担当者の不在を機に、全社で取り組む情報の共有化と再スタート 7
- 08 > 社会福祉法人 ひかり苑**
ケアの価値を最大化するために — 370名の組織が挑む、事務作業の「徹底的な最適化」とマインドシフト 8
- 06 > 株式会社 繁農園**
「現状維持は退化と同義」 — 園業の未来を拓く、データ可視化とAppSheet導入の全舞台裏 9
- 07 > 三信興業 有限会社**
「まずはやってみる」が組織を変える — ホワイトボードのデジタル化から始まった、情報共有革命 10
- 08 > 有限会社 光成**
「ド・アナログ」からの脱却 — 2人体制の組織が、サーバー導入で手に入れた“三重の安心”と経営基盤 11

DXで生産性向上や売上拡大を目指しませんか？

デジタル技術を活用した業務変革等に取り組む市内の中小企業を対象に、専門家による、課題の分析から目標設定、解決に向けた伴走支援を行い、生産性向上のロールモデルとなる事例を創出し、市内中小企業にDXの取組の波及を図ります。

STEP 01

現状の可視化

支援の始めに、DXスタート診断を実施して現状について可視化し、開始時点での強みや今後補強していくべき課題点を明確にします。



現状把握

ヒアリングの実施とDX診断を実施し、現状把握を行います。

可視化

業務で扱う情報について流れ・媒体・受け渡し方法などをヒアリングします。その後、一覧表にて可視化(専門コンサルタントが作業)いたします。

課題整理

診断結果を元に課題を整理。課題によって「**DXによる売上拡大**」「**DXによる業務改善**」「**DXによるリスク回避**」の3テーマに沿った短期～長期の目標を設定します。

STEP 02

計画書の作成



STEP1での実施内容に基づき、支援企業ごとに仮説DX推進計画を策定。経営者の意向に基づき、売上拡大、業務効率化、リスク回避の課題解決計画を立案し、KPIを設定します。計画書を作成し、経営者と実務担当にご説明し、合意形成を図ります。

その後、デジタルツールの導入支援を行い、既存ツールがあればベンダーと打ち合わせし、運用・サポート体制を整備。ツールの導入後も、自社で活用できる状態を目指し支援いたします。

STEP 03

補助や制度のご案内



ITツールの導入にかかる費用の補助として、公的機関の各種補助や助成制度を支援企業へご案内。また、担当するDXアドバイザーが導入したITツール提供先と連携することでツールをより活用できる環境を整え、課題解決を支援します。

STEP 04

効果測定



「DX推進度診断」を実施し、支援開始時との差異を明確にし、さらなる改善に向けたサポートを実施します。初期の可視化結果を再度分析し、実行計画や現状との乖離点など、課題を再度認識・分析し、その後の解決方針を策定。これにより、課題の明確化やDXのモチベーション向上につながります。

有限会社 周陽ガーデン



- 所在地 〒743-0045 山口県光市宮ノ下町2番14号
- 事業内容 住宅のエクステリア(外構)・造園の設計・施工、リフォーム
- 従業員数 17名

HPは
こちら



「紙と属人化」からの脱却 —— 40年分のデータをデジタルに集約し、組織の「自走」を目指す

参加の背景

見積もり管理の「不透明さ」がデジタル化の出発点

正社員15名、パート2名を合わせた17名の体制の社内には、営業活動における「情報のブラックボックス化」という大きな課題がありました。依頼(案件管理)、図面作成、見積提出までのデジタル管理ができておらず、いつ、誰が、どのような見積を出したのか把握しづらい状況でした。営業担当によっては手書きで管理している者もあり、事務側も過去資料を膨大なファイリングの中から探し出すという時間のロスを抱えていました。こうした「紙ベースの属人化した業務」を何とかしなければならないという危機感が、私たちの背中を押しました。

支援で取り組んだ内容と成果

1 単発ソフトから「一貫通貫」のシステム活用へ

かつて、特定の業務のためだけにソフトを導入したこともありましたが、当時は使いこなせずに失敗した経験があります。そのため、今回は「情報の共有しやすさ」と「一貫性」を重視しました。

具体的には、受注後の原価管理には、「U-Connect(ユーコネクト)」を、受注前の営業活動や見積管理には「ArchiLink(アーキリンク)」を導入しました。これらを選んだ決め手は、単なる機能性だけでなく、私たちの業務に寄り添ってくれるサポート体制です。過去30～40年分の膨大な図面や見積データをシステムへ移行する作業も親身に手伝ってくれており、このデータ蓄積こそが今後の私たちの大きな財産になると確信しています。

導入ソフト ▶▶▶▶

- ▶ U-Connect(ユーコネクト) 受注後の原価管理
- ▶ ArchiLink(アーキリンク) 受注前の営業活動や見積管理

今後の展望

デジタル化の最大の目的は、単なる効率化ではありません。情報の共有スピードを上げることで、お客様へのレスポンスの質を高めることです。

また、これまでは仕事量が増えると「人を増やすしかない」という発想になりがちでしたが、デジタル化によって一人ひとりの生産性が向上すれば、今の人数のままでもより質の高い仕事ができるようになります。

レスポンスの質が
顧客満足度と企業の未来を作る

2 「書く暇があるなら、打とう」—— 現場で起き始めた意識改革

システムを導入してまだ数週間ですが、社内では着実な変化が起きています。

まずは事務側がシステムを熟知し、営業担当にいつでも教えられる体制を整えているところです。

象徴的なのは、日報やメモのデジタル化です。これまでは紙に書き出すのが当たり前でしたが、今後は「その暇があるならシステムに直接打ち込もう」という考えを浸透させていこうとしています。まだ全ての業務がデジタルに置き換わったわけではありませんが、「一つの案件に情報を集約すれば、誰が見ても状況が分かる」という安心感が生まれ、情報の整理整頓の利便性と重要性がわかるようになってきます。

☑ 日報やメモのデジタル化で 情報の整理整頓

今後DXに挑戦する企業へ

もし自社だけでデジタル化を進めようとしていたら、どのソフトが良いのか探し出すだけで力尽きていたでしょう。今回の事業を通じて、私たちの業務を理解し、伴走してくれる専門家と出会えたことが最大の勝因です。

デジタル化やDXに悩まれているなら、まずは「相談できる場所」を見つけることから始めてみてください。一歩踏み出し、情報が共有される喜びを実感できれば、組織は必ず変わり始めます。私たちの挑戦はまだ始まったばかりですが、このデジタル化の基盤が、数年後の大きな成長を支えてくれると信じています。

有限会社 フジカワ



- 所在地 〒743-0061 山口県光市小周防字地坂10659番地1号
- 事業内容 水道本管・給排水設備・衛生設備工事・水回りリフォーム
- 従業員数 14名

HPは
こちら



「現場の見える化」が会社を強くする —— 14名の建設会社が挑む、元請け案件受託に向けたDX

参加の背景

絶妙なタイミングで訪れた「変化」のきっかけ

私たちの会社は現在、社長や役員、パートさんを合わせて14名の体制で運営しています。これまで外部のコンサルティングを受けた経験はありませんでしたが、2年ほど前に事務所を新築した際、PCやセキュリティ環境を一括で整えたことで、少しずつデジタル化への下地ができていました。今回この事業に参加したきっかけは、いつも相談に乗っていただいているベンダーさんからの紹介でした。ちょうど現場の「工数管理」について、LINEを使ったアナログなやり方に限界を感じて相談していたタイミングだったので、まさに「渡りに船」という思いで参加を決めました。

支援で取り組んだ内容と成果

LINE頼みの工数管理 ▶▶▶▶ 効率的な「出面表作成」へ

これまで、現場から日報の報告はLINEで行っていました。しかし、それでは事務側が集計する際に非常に手間がかかっていました。

今回の事業では、私ともう1名の2名が中心となり、この「出面(でづら)管理」のデジタル化に取り組みました。

現場の職人たちには、これまで通りスマホから、フォームに入力してもらう形をとり、事務側での集計フローも改善しました。

職人たちは、今まで月一回の報告で、思い出しながらの入力になることが多かったのですが、今では毎日入力に切り替え、日々必要な情報を入力していきます。

そのため、同じ内容が重複して送られてきたり、修正する判断が難しかったりと試行錯誤をする部分もありますが、事務側の入力作業はなくなり劇的に業務の効率が改善されたのは事実です。今後は、ルールを決めたり、登録した内容を確認できるようにするなどし、さらなるブラッシュアップを予定しています。

今後の展望

私たちの今の目標は、これまでの「下請け中心」の体質から脱却し、入札にも積極的に参加して「元請け」としての実績を作っていくことです。

元請けになるためには、より厳格な工事写真の管理や、工程管理、そして正確な利益管理が欠かせません。これまでは、材料の発注なども私が一括で行っていましたが、今後は現場責任者が自ら原価を意識し、責任を持って管理できる体制を構築できればと考えています。

管理能力を磨き
「元請け」として自走する組織へ

☑ 「出面管理」のデジタル化により 集計作業の時短に

特に繁忙期の集計作業では、これまで1時間近くかかっていた手間が大幅に減り、ポンとデータを移すだけで済むようになったのは非常に大きなポイントです。

☑ 使い慣れたスマホで 毎日フォーム入力管理

思い出しながらの入力が減少し、正しい報告が実現できるようになりました。



今後DXに挑戦する企業へ

デジタル化やDXといっても、最初から難しいことを考える必要はないと思います。まずは自社が「何に取り組むか」という課題の一つを決めること。それだけで、結果は全然違ってきます。私たちもまだ道半ばですが、一つずつ課題をクリアしていくことで、確実に会社が変わっていく手応えを感じています。迷っているなら、まずは一歩踏み出してみる。その小さな変化の積み重ねが、数年後の大きな成長につながるはずです。

株式会社 森モータース



所在地 〒743-0021 山口県光市浅江1丁目17番27号

事業内容 新車・中古車販売、買取、車検、一般整備、钣金塗装

従業員数 14名

HPは
こちら

「悩むくらいなら、まず動く」—— 14名の自動車整備工場が、伴走支援で実現したアナログ脱却への確かな一歩

参加の背景

アナログからの脱却を目指して再挑戦

実は昨年この事業に参加させていただいたのですが、当時は私自身に時間が取れず、具体的なシステム導入まで至ることができませんでした。「自分一人の力だけで進めるのは、正直ハードルが高い」——そう痛感していたからこそ、今年も引き続き支援を受けられると聞き、迷わず参加を決めました。これまでは、外部の支援を受けた経験もなく、業務のほとんどが紙ベースか、既存のシステムをそのまま使い続けるだけのアナログな状態。そこからどう抜け出すが、私たちの大きな課題でした。

支援で取り組んだ内容と成果

1 「ベテラン社員も使えるか?」という不安を越えて

DXに取り組むにあたって、まずは私が主体となり、実務の担当者と二人三脚の体制を整えました。一番不安だったのは、従業員の年齢層に幅があることでした。特に年配の社員にとって、デジタルツールへの移行は操作面や心理面で大きなハードルになるのではないかと危惧していたのです。

そこで今回は、無理に全てをシステムで完結させようとせず、**あえて従来のやり方を一部踏襲するような形を取りました**。結果として、懸念していたような拒絶反応はなく、想像以上にすんなりと受け入れてもらうことができました。

導入ソフトに勤怠管理アプリ「**ハーモス勤怠**」を選んだ理由は、コスト面での魅力はもちろん、私自身が前職で似たようなアプリを使っていた経験があり、馴染みやすかったからです。

導入ソフト ▶▶▶▶

▶ 勤怠管理アプリ「ハーモス勤怠」

2 わずか数ヶ月で、タイムカードのペーパーレス化を達成

12月からテスト運用を始め、1月には完全に移行しました。今では14名全員が、ICカードやスマホを使ってスムーズに打刻しています。以前はタイムカードを使っていたので、社員の日常にタイムカードを打刻という行動があり、これをスマホやICカードでの登録に変えただけです。**「変化」が少なかったということが大きなポイントです**。社員にうまく浸透しているのを実感しています。

もしこの伴走支援がなかったら、今も何も変わらないままだったでしょう。ちょうど今、別の場所に新しい拠点を作る計画を進めていますが、このタイミングで勤怠管理の仕組みを整えられたことは、組織を拡大していく上でも非常に大きな意味がありました。

☑ 勤怠アプリ導入で ペーパーレス化を達成

今後の展望

まだ全てがデジタル化したわけではありません。有給休暇の申請などは今も紙ベースですし、ほかにもアナログな部分が残っています。特に私たちの業界（自動車整備・車検）は、保存しなければならない書類が非常に多く、規制も厳しいため、なかなか「紙」から離れられない難しさがあります。しかし、今回の一歩で手応えを感じました。今後は、スキャナーを活用して書類をデータ保存するなど、現場の細かな作業時間を少しずつ削り、より効率的な環境を作っていきたいと考えています。

業界特有の「紙文化」を
少しずつ変えていきたい

今後DXに挑戦する企業へ

デジタル化やDXに悩まれているなら、私は「やるのであれば、早いほうがいい」と伝えたいです。もし導入してうまくいかなかったとしても、それは「自社には合わなかった」ということが分かっただけであり、決して無駄ではなく、会社にとっての大切な財産になります。

特に、人手不足を感じていたり、書類が煩雑で整理がつかなかったりする企業ほど、デジタル化の恩恵は大きいはずです。悩むくらいなら、まずは思い切って飛び込んでみる。その一歩が、未来を大きく変えてくれるはずです。

富士機工 株式会社



- 所在地 〒743-0022 山口県光市虹ヶ浜1丁目5番23号
- 事業内容 配管材料、空・油圧機器、電動工具、環境改善機等の販売
- 従業員数 24名

HPは
こちら



「ブラックボックス」からの脱却——IT担当者の不在を機に、全社で取り組む情報の共有化と再スタート

参加の
背景

IT担当者の退職で見えた、情報の「属人化」という課題

以前はITに詳しい人間が一人でシステム周りを管理していましたが、その担当者が退職してしまったことで、業務の進め方やツールの活用状況が「ブラックボックス化」してしまうという大きな問題に直面しました。特に営業部門では、情報共有が個々の中で完結しており、営業事務との連携がうまく取れていないこともありました。ツール自体は導入されていたものの、実際には活用されず「ただアプリが入っているだけ」の状態。私自身もITに詳しいわけではなく、「何とかしなければ」と思いながらも何から手をつければいいのか分からずにいた時、ちょうどこの伴走支援のお話をいただき、まさに最高のタイミングで参加を決めました。

支援で取り組んだ内容と成果

1 現場の「リアルな声」を拾い上げ、スタートラインに立ち直す

今回の支援でまず取り組んだのは、現状の業務フローを紐解き、ツールがどう使われているのか（あるいは使われていないのか）を可視化することでした。

私たちが重視したのは、**現場の「生の声」を聞くこと**です。私と営業事務、そして営業担当者が一堂に会し、今の課題や「本来はどうしたいのか」を徹底的に話し合いました。この過程で、以前の体制では「要望は出してはいたけれど、結局手つかずのまま止まっていた」という情報の滞留が次々と明らかになりました。

いきなり全てを変えるのではなく、まずは営業担当1名と営業事務1名による「スモールスタート」のプロジェクトを立ち上げました。今のツールをどう活かせば会社として情報共有ができるのか、もう一度同じスタート台に立って考え直す機会を得たことは、私たちにとって非常に大きな一歩でした。

2 スタッフの「モヤモヤ」が、期待と責任感に変わる

プロジェクトを進める中で、目に見える変化がありました。それはスタッフたちの「マインド」です。これまで現場がずっと抱えていた「モヤモヤ」を言葉にして吐き出せたことで、社内の雰囲気は少しずつ「期待」へと変わり始めました。

「言っても変わらない」という諦めから、「自分たちが言ったことで、会社が動こうとしている」という実感へ。私自身も、彼らの期待を裏切らないように動かなければならないという強い責任感を感じています。他社の劇的な成果発表を見て焦りを感じることもありましたが、伴走支援者の方から「ツールを使いこなすための『人の意識』を変えるフェーズであり、スタートラインが違うのだ」と励まされたことで、地に足をつけて取り組む自信ができました。

業務の
可視化

「スモールスタート」の
プロジェクト立ち上げ

現場の「リアルな声」

会社を動かすかもしれない

今後の展望

私たちのDXは、まだ始まったばかりです。今後は、現在不透明になっている営業日報や顧客管理をデジタルで一元化し、社長が知りたい情報をタイムリーに共有できる環境を整えていきます。単に新しいツールを入れることが目的ではなく、蓄積された情報をどう活用し、最終的に売上や会社の成長に繋げていくか。そのための「運用のルール」を徹底し、第三者の視点も借りながら、二人三脚で実効性のある仕組みを作り上げていくことが次のステップです。

ツールを「手段」として使いこなし
売上に直結する仕組みへ

今後DXに挑戦する企業へ

「何から手をつければいいのか分からない」「自分たちだけで進めるのは限界がある」。そんな悩みを抱えている企業は多いと思います。私たちもそうでした。しかし、自分たちだけで悩んでも時間は過ぎていくだけです。今の世の中には便利なツールがたくさんあります。まずはこうした支援の機会をフルに活用し、プロのアドバイスを受けながら「自社に合うもの」を見極めていく。もし失敗したとしても、やってみないことには何も進みません。迷っているなら、まずは一歩、踏み出してみることをお勧めします。

社会福祉法人 ひかり苑



所在地 〒743-0023 山口県光市光ヶ丘3番17号
事業内容 医療・福祉
従業員数 370名

HPは
こちら



ケアの価値を最大化するために —— 370名の組織が挑む、事務作業の「徹底的な最適化」とマインドシフト

参加の背景

現場を「雑務」から解放し、ケアマネジメントの質を高める

私たちの法人は、5つの拠点に約370名の職員を擁しています。DXへの取り組みを本格化させた背景にあるのは、現場スタッフを「事務作業」という目に見えない負担から解放したいという強い想いでした。福祉の現場において、記録や報告といった事務作業は避けて通れません。しかし、それらがスタッフを現場から遠ざけ、ケアの質を停滞させてしまうのであれば、それは「解決すべき課題」です。私が目指したのは、デジタルの力で雑務を削ぎ落とし、職員が本来の使命である「利用者様と向き合う時間」を最大化できる環境を構築することでした。

支援で取り組んだ内容と成果

1 「現状維持」と「変革」を繋ぐ、戦略的なファーストステップ

いきなり大きなシステムを導入し、現場を混乱させるのではなく、まずは「紙の形式を保ったまま電子化する」というステップを、DocuWorksというシステムを活用しスモールステップで着手していました。これは、職員が皆デジタル化に慣れるための一歩です。

今回の伴走支援では、さらに一歩踏み込み、「業務の徹底的な棚卸し(可視化)」と「業務フローの再構築」に注力しました。これまで私一人で取り組んでいたDX推進ですが、外部の専門家が客観的な視点で介入することで、組織全体に「これは必要な変革である」という認識をもってもらい、協力体制が生まれプロジェクトが推進しました。

2 「確かな手応え」が、現場のマインドを書き換える

変革の過程では、当然ながら戸惑いの声もありました。しかし、実際にデジタル化を進めたことによって「書類を配布して回る手間がなくなる」といった小さな成功体験を積み重ね、職員の姿勢は確実にポジティブなものへと変化していきました。

また、業務フローの可視化によって、「どの作業を削れば、どれだけの時間が生まれるか」という投資対効果(ROI)が明確になったことは、経営判断のスピードを上げる一助になっています。

☑ スモールステップで デジタル化を着実に浸透

☑ 業務フローの可視化により 投資対効果(ROI)が明確に

今後の展望

私たちが描く未来は、必要な情報が瞬時に引き出され、無駄な工程が一切排除された「情報のインフラ」が整った状態です。もちろん、新しいツールの導入頻度は慎重に調整し、現場の受容性を超えないよう配慮する必要があります。しかし、今回得られた「変革のメソッド」を活かし、今後はチーム体制を強化することで、外部の力を借りずとも自律的に改善を回し続けられる組織へと進化させていきたいと考えています。

情報の即時性とケアマネジメントの
質が融合する「自走する組織」

今後DXに挑戦する企業へ

地方の、特に福祉業界では、DXの専門担当者が不在であるケースが少なくありません。もし自社内だけで解決しようとして停滞しているのなら、外部のプロフェッショナルによる伴走支援を活用することをお勧めします。それが、組織の体質を変え、未来を切り拓くための「最短かつ確実なルート」であると、私たちは確信しています。

株式会社 繁農園



- 所在地 〒743-0071 山口県光市室積新開2丁目7番23号
- 事業内容 造園業全般、土木工事、外構工事（エクステリア）
SHOP（クライミングギア、チェーンソー防護服、
ハスクバーナー・ゼノア販売店、園芸資材）
その他（園芸、林業、アウトドアetc）
- 従業員数 24名

HPは
こちら

「現状維持は退化と同義」—— 園業の未来を拓く、データ可視化とAppSheet導入の全舞台裏

参加の背景

「データはあるが見えない」という課題からの脱却

私たちの会社は現在、従業員24名で造園業を営んでいます。私が、入社し半年が経った頃、外部機関の助けもかりながら「自社の現在地を再構築しよう」と計画立てを行いました。その中で、過去に現場管理ツールを導入したことはありましたが、十分に活用できていないと言いつつも、帰社後に責任者がパソコンでExcel入力、翌日事務が案件毎、人毎のシートに転記、データは「蓄積」はされていても、決して「分析できる状態」ではなかったことなどが可視化され、この「業務のブラックボックス化」を解消し、次の10年、20年の軸を見つけることが私たちの至上命題だと気づきました。

支援で取り組んだ内容と成果

1 プロの目利きで選んだ「AppSheet」という最適解

まずは業務の洗い出しと課題の言語化を徹底して行いました。当初は在庫管理のためにECサイトのような大規模なシステムの導入も検討しましたが、今回伴走していただいた山口さんのプロの視点で、「今の自社のスペックには過剰すぎる」とアドバイスをいただきました。自社だけで探していたら、コストばかりが高く機能が合わないものを無理に入れていたかもしれません。最終的に二重作業、入力場所が限られる日報業務の課題解決に取り組み「AppSheet」を導入することに決めました。

現在は、現場の職人が入力したデータが「Looker Studio」によって即座に可視化される仕組みを構築し、個人ごとの稼働時間やプロジェクトの進捗がグラフにより、一目でわかるようになったことは、管理コストの削減において劇的な効果を生んでいます。

導入ソフト ▶▶▶▶

▶ AppSheet（アップシート） 日報業務管理

▶ Looker Studio（ルッカースタジオ） データ可視化ツール

2 若手社員の「デジタルアレルギー」をどう解かすか

意外だったのは、若手社員からも、やり方が変わることに抵抗があったことです。現場での段どりに9割のエネルギーを使い果たす職人にとって、事務作業の新しい入力「プラスアルファの負担」に感じられたのでしょう。そこで私は、事務方1名と現場1名を巻き込んだプロジェクトチームを作り、徹底した「巻き込み」を行いました。

- 「なぜこの情報が必要なのか」を言語化して伝える
- 「慣れればこっちの方が楽だ」と思えるまでフィードバックを繰り返す
- 現場が欲しい機能を即座に形にする

この3ヶ月間、伴走支援者の方と驚くほどのスピード感でバグ出しと改善を繰り返した結果、今では現場からも「欲しかった機能が形になっている」と手応えを感じるまでになりました。

今後の展望

今回の取り組みで得られた最大の成果は、「課題が言語化され、自社の仕組みにフィットしたツールを活用し、データの蓄積を図り、蓄積されたデータを活用することで、さらなる課題や新しい取り組みにチャレンジができることです。また、未来のビジョンがクリアになったことも大きな成果です。私個人でも、管理業務を効率化し、新たに確保できる時間を、現場のスキルアップや新たな戦略立案に充てることで、よりよいサービスをお客様に提供できると確信しています。

今後DXに挑戦する企業へ

「DX」という言葉に身構える必要はありません。「課題発見」や「課題改善」のようなものと捉えてもいいかもしれません。

私が伝えたいのは、「現状維持は退化と同義である」ということです。一瞬一瞬が過去になっていく中で、変化を恐れることこそが最大のリスクです。今回の「ファーストステップ支援」のような伴走型のプログラムは、経営面から見ればノーリスクで自社の課題を浮き彫りにできる、非常に価値のある機会です。迷っているなら、答えは「イエス」しかありません。まずは一歩、踏み出してみてください。その一歩が、会社を劇的に変えるきっかけになるはずです。

三信興業 株式会社



- 所在地 〒743-0021 山口県光市浅江6丁目14番2号
- 事業内容 一般貨物自動車運送事業
- 従業員数 8名

「まずはやってみる」が組織を変える —— ホワイトボードのデジタル化から始まった、情報共有革命

参加の背景

アナログな反復作業への危機感と、信頼が生んだ「挑戦」

私たちの会社は、国認可の運送事業をやっています。今回のプロジェクトに参加した直接のきっかけは、日頃からお世話になっている三知の山口さんからのご案内でした。正直なところ、最初は「自分たちには無理だろう」という思いが強かったです。これまでは業務の多くを紙ベースやエクセルでの手入力に頼っており、同じ情報を何度も書き写すような非効率な作業が常態化していました。しかし、「まずはやってみよう」という社長の決断と、伴走してくれる担当者さんへの信頼が、私たちの背中を押してくれました。

支援で取り組んだ内容と成果

1 ホワイトボードを「共有モニター」へ。 現場と事務を繋ぐリアルタイム通信

今回の支援で私たちが取り組んだ最大の変革は、事務所の「ホワイトボード」を「デジタルモニター」へと置き換えたことです。

これまでは、スケジュールや重機の配車状況をホワイトボードに書き込み、それを社員がメモしたり写真に撮ったりして確認していました。しかし今回、デジタル共有モニターを導入したことで、システムに入力した情報が瞬時にモニターに映し出され、さらに社員一人ひとりのスマートフォンからでもリアルタイムで確認できる体制が整いました。

この「情報の可視化」により、「週明けの自分の仕事は何だったか」と電話で問い合わせるような無駄なコミュニケーションが劇的に減少しました。社員は自分のスマホでスケジュールを把握できるようになり、現場の利便性は飛躍的に向上しています。

2 デジタルがもたらした「心のゆとり」と「自走する意識」

デジタル化を進める中で、最初は「入力が上手くない」といった細かな苦労もありましたが、伴走支援があったおかげで、一つひとつ壁を乗り越えることができました。

何より大きな変化は、社員の中に「デジタルを使えば楽になる」という共通認識が生まれたことです。以前は、指示を受けるたびに紙のメモを取るのが当たり前でしたが、今では「携帯で見れば済む」という安心感が生まれています。社長や専務からも「これもデジタル化できないか？」と自発的なアイデアが出るようになるなど、組織全体が前向きなマインドに切り替わったことを実感しています。

☑ 「情報の可視化」により 現場の利便性が向上

☑ 「デジタルを使えば楽になる」という認識の変化

今後の展望

今回の取り組みは、あくまで「ファーストステップ」です。今後は、他社の事例にも刺激を受けながら、現在は手書きで行っている「作業日報」のスマートフォン入力への移行を検討しています。

運送事業という規制の厳しい業界に身を置いているため、アルコールチェックや体調管理など、デジタル化すべき課題はまだ多くあります。将来的には、現場での入力データがそのまま請求書発行までシームレスに繋がるような、一気通貫のシステム構築を目指していきたいと考えています。

日報の完全デジタル化
そして請求業務の自動化へ

今後DXに挑戦する企業へ

DXという言葉を難しく考える必要はありません。大切なのは「チャンスがあればチャレンジしてみる」という姿勢です。私たちも、もし今回の話がなければ、今も紙ベースの古いやり方を続けていたでしょう。

「やってみてダメならやめればいい」というくらいの軽い気持ちで、まずは一歩踏み出してみてください。外部の視点を取り入れることで、自社だけでは気づけなかった効率化の道が必ず見えてくるはずです。

有限会社 光成



所在地 〒743-0044 山口県光市和田町21番13号
事業内容 管工事・鋼構造物工事・機械器具設置工事
従業員数 12名

HPは
こちら



「ド・アナログ」からの脱却 —— 2人体制の組織が、サーバー導入で手に入れた“三重の安心”と経営基盤

参加の背景

世代交代を見据え、「情報の属人化」に終止符を打つ

これまでデジタル化とは無縁で、自他ともに認める「ド・アナログ」な会社でした。

しかし、将来の世代交代を見据えた時、今のうちに仕事の棚卸しを行い、情報の管理体制を整えておかねばいけないと、思っていたところ、今回の「伴奏支援」という機会を知り、社内環境の整備に取り組むことにしました。

支援で取り組んだ内容と成果

1 「1台のPC」に依存するリスクを、プロの視点で可視化

今回の支援を通じて浮き彫りになったのは、情報管理体制の弱さでした。大切なデータが1台のパソコンに集中しており、正しい管理やバックアップ環境が整っていない点です。

パソコン故障時の「データ破損」というリアルなリスクでした。もし今、このパソコンが壊れたら、長年積み重ねてきた業務データが消失してしまう。そのリスクを解消するために、「サーバーによるデータの一括管理」という解決策を選びました。

2 サーバー導入と「三重の安全策」で実現した、違和感のないデジタル化

具体的には、ビジネス用データ保存サーバーを導入し、自動バックアップ体制を構築しました。

●ファイルサーバーとしての役割

サーバー本体の複数のHDDでの冗長化、外付け機器へのさらなるバックアップ。パソコンデータも業務終了時点でのバックアップ保存。

●強固なバックアップ体制

サーバー内の自己診断機能に加え、外付けHDDやレプリケーション、さらにはクラウドへの自動バックアップまでを見据えた、多層的な危機管理体制を提案いただきました。

現在は、パソコンがもし壊れたとしても「三重の安全」が守られているという、非常に心強い状態になっています。何よりありがたいのは、これらのデジタル化が日常業務に自然と溶け込み、全く違和感なく運用できている点です。

☑ データ保存サーバーを導入し データを一括管理

今後の展望

自分たちだけで調べても、ここまでの体制を築くことは絶対に不可能だったと感じています。伴奏支援のメリットは、自分たちの知識の範囲を超えた専門的なアドバイスももらえたことです。社内業務のヒアリングをしてもらった際、「意外とシンプルなフローで回っている」と客観的に評価していただいたことも、大きな自信になりました。情報管理という土台（インフラ）ができた今、これからは経営に携わる人材の育成に力を入れ、より強固な経営基盤を築いていきたいと考えています。

得られたのは
知識を超えた「経営の安心感」

今後DXに挑戦する企業へ

もし、デジタル化への不安や悩みがあるのなら、まずは信頼できる相談窓口や取引先に声をかけてみてください。

特に、私のように「うちはド・アナログだから」と思い込んでいる経営者の方にこそ、この一歩をお勧めしたいです。プロの力を借りて自社の課題を整理してもらうだけで、イレギュラーな事態にも動じない「未来への備え」を手に入れることができるはずです。

お問い合わせ

[発行]

DXファーストステップ支援事務局 (運営: 株式会社フォーバル)

〒743-8501 山口県光市中央六丁目1番1号

光市 経済部 商工振興課

Tel : (0833)72-1519

Mail : syoukou@city.hikari.lg.jp